

自己肯定感を育む教育：ロングセラー絵本の読み聞かせ —「こどものとも」4作品を通して

浅木尚実（淑徳短期大学社会福祉学科 児童福祉コース専任講師）

要約

幼児期に子どもの自己肯定感を育むことは、その後の人生に多大な影響を与える。自分に対する価値観や存在意義の獲得は、社会性のみならず、生きる力の基盤作りに直結する。幼児の自己肯定感育成において、一般化しやすい技術に絵本の読み聞かせがあげられる。容易に行えるコミュニケーション方法であり、物語を共有する喜びを分かち合える作業でもある。絵本には、多彩な主人公の姿が画家の力量とともに描かれるが、ストーリーの展開の中で、主人公の生きる姿勢こそが、子どもの生きる力や価値観の核を形成することに注目した。本論では、約40年以上出版を重ねているロングセラーのうち、日本の絵本成立史上草分け的な存在である「こどものとも」（福音館書店）の中から、日本人の作家による代表的な絵本4冊を取り上げ、その特色や主人公の行動を分析した。4冊の絵本の主人公は、困難な状況を与えられながら、前向きで挑戦的な姿勢を貫き、満足のいく結末を迎えている。これが、世代を超えて共感されながら繰り返し読まれ続けている要因の一つと考えた。時代を超えて伝承され続けていくこの4冊のロングセラー絵本が、自己肯定感を育む要素を持つことを究明したい。

キーワード：自己肯定感、読み聞かせ、イメージ、絵本、ロングセラー絵本

はじめに

わが国では、近年、いじめ、うつ、不登校、摂食障害をはじめ、子どもを取り巻く諸問題が渦まき深刻な社会問題となっている。こうした環境下で、2009年に実施されたベネッセ教育研究開発センターの質問紙調査¹⁾では、小学生から高校生に至るまで、自分の性格に対する満足度は、50%に満たない結果となっている。また2007年ユニセフが実施した「子どもの幸福度調査」²⁾においても、「孤独を感じる」に関する質問が29.8%と高く、OECD加盟国25カ国中でも、日本の子どもは、幸福と感じている割合が極めて低いことが判明した。子どもの自殺率の高さが象徴するように、子どもは自分に対する価値や存在意義に悩んでいるのが現状である。こうした実情を重く受け止め、子どもの成長・発達の過程で、子ども自身の自己肯定感をしっかりと育んでいくことが重要な課題となっている。子どもの心の健康へ寄り添う援助は、学力偏重主義の日本の教育界の陰で、後回しにされてきた感が強い。ゆとり教育においても自己肯定感育成につながったわけではなかった。自己への肯定的評価が可能になれば、前向きに解決策を考えることになり、情緒の安定のみならず、社会的適応力、逆境に強いといった本来の生きる力につながっていく。しかし、自己肯定感を育成することは、速水敏彦が指摘した「仮想有能感」という歪んだ自己愛的な自尊感情とは全く違う。人生の初期段階である保育、幼児教育の現場では、自己のみならず、他者についても尊厳を重んずることができるよ

うな自己肯定感を育てる策を早急に考え、実行に移すことが肝要である。同時に、子育て支援が義務化された保育現場から、育児に迷う保護者へ打開策を発信していくことも急務であると思われる。

一般的に教育界でいわれている自己肯定感を高める方法とは、「子どもの行動を肯定的に捉える」、「ほめる」、「子どもの言葉に耳を傾ける」等、子どもが自身に価値を見出し、考えを発展させていくように仕向けるものである。本論では、子どもの自己肯定感を高める具体策の一つとして、絵本—特にロングセラーを続けている絵本の読み聞かせが子どもの自己肯定感育成に欠かせないと推測した。ロングセラー絵本とは、「40年以上、版を重ねながら出版され、現在でも売れ続けている絵本」と定義するが、子どもからの支持がなければ長期間の出版は不可能である。次にあげる『こどものとも』（福音館書店）4冊は、日本人の作家によって創作されたロングセラーである。『ぐりとぐら』（1963初版・2011年8月現在188刷）、『ぐるんぱのようちえん』（1965初版・2011年8月現在133刷）、『しょうぼうじどうしゃじぶた』（1963初版・2011年8月現在132刷）、『だるまちゃんとてんぐちゃん』（1967初版・2011年8月現在141刷）の4冊は、初版年、版数が示すように世代を越えて親から子へと、子どもの心をつかんできた。本論では、子どもに支持され続けてきた理由を深慮し、子どもの自己肯定感育成に貢献する絵本の条件とは何かを探る。

1. 子どもと自己肯定感

子どもの発達と自己肯定感

自己肯定感とは、心理学用語であるが、「自分に対して前向きで好ましく思うような態度や感情」（田中、2008）と定義されている。児童精神科医古荘純一は、学校現場の相談において、「居場所がない」「疲れた」と訴える子どもたちを目の当たりにし、日本版 QOL 尺度の開発に携わった。その調査の結果から、自分自身や学校などの満足度に関する質問に対し、下から 2 番目の「ほとんどない」を選択している子どもの多さに衝撃を受けている。前述したように、ユニセフの調査でも、日本の子どもの主観的な幸福度は、他国と比べて突出して低いことが報告されている。原因の第一として考えられるのは、社会全体に不安が蔓延していること。第二には、両親の自己肯定感が低く、それが子どもに投影していること。第三には、子どもの自己肯定感を積極的に育成していく環境が整っていないことである。周囲の大人が、子どもに否定的なメッセージを送り続けると、自分の存在価値を評価できず、自己に対する受容も困難となり、自己肯定感を育成できないまま成長してしまう。特に、第三の環境構成については、人的環境でもある周囲の大人が行動を起こすことで、改善を図ることができる。ロングセラー絵本の読み聞かせが自己肯定感を育むと考える要因として、絵本が与えるイメージが子どもの心に根付いていくことがあげられる。

2. 成功体験のイメージ作りとしての絵本

イメージの蓄積

子どもが自分自身に価値を見だし、自己実現を高めていくためにはイメージ作りが必要である。実体験の有無にかかわらず、人間はイメージを使って考えることによって世界について理解してきた。イメージは無意識から意識へ絶えず送られながら、出来事をどう予期するかについての基礎を形成していく。デボラ・プラマーは、イメージを「世界について理解することのできるもっとも初期の手段」と表現した。（P. 30 プラマー、2009）イメージが、経験や認識として貯蔵され、人生を通じて内的なイメージに関するメモリー・バンクを作り上げていく。そこで得たイメージは、価値観を形成し、自己への自信や窮地を打破する人間力をも培ってきた。経験の浅い幼児期の子どもに対して、豊富なイメージの提供を最も容易にするのは、子どもの文学である絵本である。児童文学者・瀬田貞二は、『絵本論』で次のように述べている。

物語に現れる登場人物のさまざまな行動が描いてみせる、人生の最初の重大な問題！言葉と絵の表現してくれるイメージの確かさ、美しさ。事件の進展の意外

な局面にさそわれるところよいスリルと興奮、またふしぎの感情。ナンセンスとユーモアのセンス。物語を動かす大きな理念への同化。生き生きと想像力をよびおこすドラマ。こうして列挙したポイントは、みな、小さな子どもが物語をきく楽しみのなかに深くひそんでいて、単なる知育以上の、人間性全体におよぶ創造的な事柄なのです。（pp.74-5 瀬田、1985）

絵本の読み聞かせの過程で、子どもは主人公に同一化し、ストーリーに自分の行動を重ね合わせる。パーサニア・サティアは、「生まれ落ちたばかりの乳児は過去を持っておらず、自らを守る経験や、自分自身の価値を判断する尺度を持っていない。幼児は、まわりの人と共有している経験や、まわりの一人の人間としての価値について自分に与えるメッセージに頼らざるを得ない。」（p.24 サティア、1991）と述べている。「自分自身の価値を判断する尺度」の方法として、絵本が提供するイメージの積み重ねが一つの手がかりとなる。子どもは絵本から新しく役立つイメージを取り込み、たえず積極的な未来を創造する可能性を秘めている。特に幼児期において絵本からのイメージの取り込みに有効な手段は、大人からの読み聞かせの体験を通して行われていくことが必要である。

読み聞かせとは、「聞く」体験

イメージを幼児期に形成するためには、絵本の内容を自分の中に取り込む必要がある。基本的には、就学前に文字教育が義務化されていない日本の教育システムでは、絵本を子どもに読み聞かせることが推奨されている。たとえ、文字が読める子どもであっても、自分で読む作業と読み聞かせてもらう体験とは全く異なっている。しかし、早期教育では自分で文字を読むことを推奨する。人間の進化では、コミュニケーション技術である「聞く・話す」の歴史が長く、文字はずっと後で発生したものである。バリー・サンダースは読み書きを学ぶ時期の延期を強調し、文字の早期教育に警鐘を鳴らしている。その理由として「注意深く聞き」「耳を訓練せずに、テキストを読む目に力をおくことは、十分な識字の発達を妨げるだけである。」（p.305 サンダース、1998）と述べ、「聞く」訓練の重要性が識字教育の基礎と説いている。識字教育において、早期に文字を読ませることは、かえって識字教育の発達を遅らせる原因になるのである。

読み聞かせは愛情表現

読み聞かせは、大人が「読む」行為を子どもが「聞く」共同作業であり、そこには、絵本を介しての物語の共有と心の対話が行われる。その時、同時に両親の声とともに、愛情が子どもの耳を通して心に流れ込み、読み聞かせを受けた経験を思い起こすたびに、親に愛されていた記憶が蘇る。筆者が担当する授業「児童文化」

での学生体験レポートでは、女子学生 A は、毎晩の読み聞かせの体験を通して、「自分が両親に愛されていたことを感じ、目頭が熱くなりました。」と思い出をを語り、男子学生 B は、読書好きの母の影響が現在の自分を作ったとの前置きの後、「絵本の読み聞かせが、親子のコミュニケーションや愛着形成に大きな役割がある。」と報告している。授業で紹介した絵本を通して、絵本の記憶とともに、親からの愛情を改めて認識した結果であろう。

児童図書館員の L.H. スミスは、「子どもは、一人一人が個人である。そこで、私たちが、その子どもの最初の本にふれさせる場合、まずめざさなくてはならないのは、どの子にもあてはまり、また、永続的で、成長しようという子どもの本能的要求にこたえることのできる伝達の方法を見いだすことである。」(p. 203 スミス、1964) と述べている。ここでいう「伝達の方法」こそが、読み聞かせであるが、その際の絵本選びも重要であろう。時代に左右されない特質をもつ絵本こそが、子どもが繰り返し求める本となりうるからである。

3. ロングセラー絵本と自己肯定感

子どもの側から描いた絵本

松居直は、子どもの絵本について、子どもの側から描かれることの重要性を強調している。マリア・ニコラエヴァは、絵本の視点を分析することによって、子どもの発想や子どもの気持ちの描写への判断を論理的に明らかにした。筆者も「絵本における大人と子ども

の視点」の違いを論点にし、ウルフ・スタルクの絵本分析を通して、絵本が子どもの視点に立つことの重要性を説いてきた³⁾。

しかし、絵本は毎年夥しい点数が出版されている現状があり、必ずしも幼児の自己肯定感を育み、子どもの視点に立った絵本が出版されているわけではない。出版界の混沌とした状況の中で重版を続け生き残っていくことは、長期間多数の子どもたちの支持がなければ実現不可能である。戦後、歴史的に支持されてきた日本の代表的なロングセラー絵本の多くは、1960 年代～70 年代のものが多く。本論で選択した 4 冊は、児童文学者三宅興子の調査により、子どもからの支持が高いと判断されている。三宅は、1970 年度以降、5 年ごとの自身の文庫における貸し出し調査により、「こどものとも」の『ぐりとぐら』『しょうぼうじどうしゃじぶた』『だるまちゃんとてんぐちゃん』『ぐるんぱのようちえん』の貸し出し率の高さを証明している。(三宅興子、1997)

作品分析

ここでは、主に絵本の文章から、4 冊の作品分析を行った。その結果を表 1 に示したが、共通する特色の第一点目は主人公の設定であろう。主人公は全員子どもであり、何らかの困難な状況を抱えている。『ぐりとぐら』はふたごの野ねずみで、身体が小さいため、大きな卵を自由自在に扱うことができない。大きな道具を使って七転八倒する姿は、体の小さな幼児と重なり合う。『ぐるんぱのようちえん』のぐるんぱは、大

表 1：ロングセラー 4 冊の比較表

	『ぐりとぐら』 1963	『ぐるんぱのようちえん』 1965	『だるまちゃんとてんぐちゃん』 1967	『しょうぼうじどうしゃじぶた』 1963
主人公	野ネズミのふたご	ぞう	だるまちゃん	しょうぼうじどうしゃ
時系列による 行動の展開	運べないほど大きな卵の 発見→思案→道具の方を 搬入→カステラ作り→成 功→共食と自動車ごっこ	友人から臭いといじめら れる→ビスケット屋→お 血つくり→ピアノ工場→ 自動車工場→子だくさん の母親との出会い→幼稚 園開設	てんぐのうちわへの羨望 →ヤツデの葉っぱ→帽子 への羨望→おわん→履物 への羨望→まな板→鼻工 夫して、類似した玩具を 創作する	周りのポンプ車やはしご 車と比べ、自分の力のな さに劣等感→ジープとし ての自分の特長をいかし た活動の場→実証
困難	身体より大きな卵や道具 への挑戦	求められているものより大 きなものを作ってしまう	てんぐちゃんの持ち物へ の憧れ	体が小さく、人の役に立 てない
解決すべき 問題	大きな卵を運ぶ・大きな カステラを作る	ビスケット屋、お血屋、 ピアノ工場、自動車工場 での適正な労働	類似した玩具作り	山火事の現場での消火活動
結末	大勢の仲間と一緒にカス テラを食べる。卵のから で自動車を作って遊ぶ	幼稚園を開設。みんなで 遊び、ビスケットも一緒 に食べ、失敗が成功に逆 転する	だるまちゃんが工夫して 作った鼻にすずめがとま り、てんぐちゃんと立場 が逆転する	大きな車が活動できない 狭い場所で小さな体を生 かせる。新聞に取り上げら れ、一躍ヒーローになる

きい身体に恵まれている象にもかかわらず、仲間にいじめられる弱者である。就いた仕事先では大き過ぎる物しか制作できず、5回の解雇を経験し自信喪失状態である。『だるまちゃんとてんぐちゃん』では、だるまちゃんは、自分が持たない道具を所有するてんぐちゃんに羨望を感じている。『しょうぼうじどうしゃじぶた』のじぶたは、小さな車体に悩んでいる。最新式のポンプ車やはしご車と比べ、活躍の場がなく自分の存在意義を確かめることができない。この第一の共通点は、主人公の悩みはどれも子どもが日常的に抱いている問題であり、共感しやすい設定といえる。児童文学者石井桃子は「五歳の人間には五歳なりの、十歳の人間には十歳なりの重大問題があります。それをとらえて、人生のドラマをくみだてること、それが、児童文学の問題です。」(p. 71 石井、1999)と述べている。第二の特色は、解決すべき課題が提示されることである。『ぐりとぐら』では、大きな卵への挑戦であり、『ぐるんぱのようちえん』では、5種類の工場現場での懸命な働きであり、『だるまちゃんとてんぐちゃん』では、友達の玩具を模倣するための創作活動であり、『しょうぼうじどうしゃじぶた』では、山火事における消火活動である。この課題に挑戦する過程で、主人公は自信を深めていく。

第三の共通点は、この主人公たちが次々と困難を克服し、成功する過程が描かれていることである。ぐりとぐらは、試行錯誤の末、大きなお鍋やフライパンを大きな卵の場所に運び、かまどを作ってカステラを焼きあげ、大勢の仲間と食べる。ぐるんぱの製作した大きな物は、結果的には無駄にならず、幼稚園を開設し子どもたちと幸せに暮らすことができる。だるまちゃんは、自らのアイディアによって道具を工夫し、難題を見事に解決していく。消防車じぶたは、出番のなかった時期を脱し、ジープである車体を生かし、狭い山道での消火活動に一役買うことができ有名になる。どの主人公も決してあきらめず、最後には、最初に示された問題を見事に解決するのである。

まとめ

『ぐりとぐら』をはじめとするこの4冊に共通する主人公像は、子どもに共感を与えている。子どもの視点から理解できる問題を抱えているが、困難にぶつかっても、マイナス要素は微塵も見られない。ひるまず、諦めず、前向きに挑戦していく。そのひたむきさに誇張はなく、淡々と思考錯誤を重ねる主人公に、子どもたちのエネルギーを重ね合わせることができる。こうした主人公の物事に対峙する勇敢な姿には、子どもの発達にとって欠かせない達成感の実現へのイメージが内在している。自己肯定感を育成する要素は、前向き思考、達成感、子どもの成長欲である。子どもは、

絵本の読み聞かせを受けながら、主人公に自分を重ね合わせ、少しでも高いハードルを超えていく姿勢を学ぶ。読み聞かせのたびに、大人の愛情を伴いながら、自信を取得し自己肯定感を蓄えていくのである。児童精神医学者のブルーノ・ベッテルハイムは、子どもの心に、自己肯定感すなわち自分がこの世で意義のある貢献できる存在だと確信づけるものが二つあると述べ、その一つは両親と教師、もう一つが文学だと説いている。長年大勢の子どもに支持されてきたロングセラー絵本は、子どもの心の成長に大きく影響を与えている文学である。大人は、読み聞かせを積極的に行い、絵本の主人公の生きる姿勢を通して、自己肯定感を育成する環境を与えたい。実践に根ざした研究を行うことが今後の課題である。

〈使用文献〉

ながわりえこ・おおむらゆりこ『ぐりとぐら』福音館書店、1963
加古里子『だるまちゃんとてんぐちゃん』福音館書店、1967
西内みなさく『ぐるんぱのようちえん』堀内誠一え、福音館書店、1965
わたなべしげお『しょうぼうじどうしゃじぶた』福音館書店、1963

〈参考文献〉

浅木尚実「絵本における大人と子どもの視点—ウルフ・スタルクの作品を例にあげて」、『上智社会福祉専門学校紀要創刊号』2006・3月
石井桃子『石井桃子集 7』岩波書店、1999
Glouberman, D. Life Change: Develop Your Personal Vision with Imagework, London, Hodder and Stoughton, 2003
古荘純一『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか—児童精神科医の現場報告』光文社新書、2009
佐藤淑子『日本の子どもと自尊心——自己主張をどう育むか』中公新書、2009
Satir, V. Peoplemaking, London, Souvenir Press, 1991
サンダース、バリー『本が死ぬところ暴力が生まれる—電子メディア時代における人間性の崩壊』新曜社、1998
スミス、L.H.『児童文学論』石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳、1964
瀬田貞二『絵本論—瀬田貞二子どもの本評論集』福音館書店、1985
田中道弘『シリーズ自己心理学第6巻—社会心理学へのアプローチ』下斗米淳編、金子書房、2008
ニコラエヴァ、マリアとスコット、キャロル『絵本の力学』川端有子・南隆太訳、玉川大学出版部、2011
根本橋夫『なぜ自信が持てないのか—自己価値観の心理学』PHP 新書、2007
速水敏彦『他人を見下す若者たち』講談社新書、2006
原伸一『ユダヤ人の子育ての秘訣』kk ロングセラーズ、2010
ブラマー、デボラ『自己肯定・自尊の感情をはぐくむ援助技法—よりよい自分に出会うために』小杉恵・上利令子訳、生活書院、2009
ベッテルハイム、ブルーノ『昔話の魔力』波多野完治・乾侑美子訳、評論社、1978
松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール、1973
三宅興子『日本における子ども絵本成立史—こどものとまがはたした役割』ミネルヴァ書房、1997
ワトソン、ヴィクター・&スタイルズ、モラグ『子どもはどのように絵本を読むのか』谷本誠剛監訳、柏書房、2002

〈注〉

- 1) benesse.jp/berd/data/index.shtml
- 2) www.nier.go.jp-UnicefChildReport.pdf
- 3) 浅木尚実「絵本における大人と子どもの視点—ウルフ・スタルクの作品を例にあげて」、『上智社会福祉専門学校紀要創刊号』2006・3月